

新たな講師陣のもとで「ゲンロン新芸術校」が再始動します

株式会社ゲンロン（本社：東京都品川区 代表取締役：上田洋子）は、合同会社カオスラ監修のもとで開設していた「ゲンロン カオス*ラウンジ 新芸術校」の事業について、同社との契約解除に伴い、同事業の名称を「ゲンロン新芸術校」とあらため、再始動いたします。

現在開講中の第6期（2020年4月～2021年3月）については、これまでの主任講師制から、集団指導制に移行いたします。講師となるのは堀浩哉、飴屋法水、田中功起、梅津庸一各氏、そして新芸術校の卒業生で活躍中の弓指寛治、和田唯奈、磯村暖、青木美紅各氏の8名です。多様な美術観をもつ8名の協議のもと、実践的な指導を中心に行う新しいスタイルの教育に挑戦します。

最終成果展については、当初予定の岩淵貞哉、福原志保、柳美里、和多利浩一各氏に加えて、堀浩哉氏と東浩紀が審査に加わります。

弊社と合同会社カオスラが共同で運営していたアートスペース「ゲンロン カオス*ラウンジ 五反田アトリエ」については、9月1日より名称を「ゲンロン五反田アトリエ」とあらため、弊社単独での運営を継続します。新芸術校の教室や展示会場として使用されるほか、今後は、卒業生を含む幅広いアーティストの方々に開かれる場として再編成いたします。

講師 プロフィール



堀浩哉 (ほり・こうさい)

1947年富山県生まれ。美術家。多摩美術大学名誉教授。1969年に「美共闘」（美術家共闘会議）を結成、議長を務める。2010年、東京・秋葉原のアーツ千代田3331内に多摩美術大学運営のオルタナティブ・スペース「アキバタマビ21」を開設し、プロデューサーを務める（2012年まで）。第41回ヴェネツィア・ビエンナーレ、「ユーロパリア・ジャパン'89」（ゲント現代美術館）、「今日の日本」（ルイジアナ近代美術館、デンマーク他巡回）、釜山国際アートフェスティバル、「センチュリー・シティー」（テート・モダン）、越後妻有アートトリエンナーレなど、国内外の展覧会に多数参加。近年の展覧会に「堀浩哉展—起源」（多摩美術大学美術館）、「ミニマル／ポストミニマル」（宇都宮美術館）、釜山ビエンナーレ、「1968年激動の時代の芸術」（千葉市美術館）、「ニューウェイブ現代美術の80年代」（国立国際美術館）、「堀浩哉＋堀えりぜ 記憶するために—わたしはだれ？」（丸木美術館）など。



鮎屋法水 (あめや・のりみず)

1979年、17才で唐十郎の「状況劇場」に参加。1983年「東京グランギニョル」結成、演出家として独立。1990年からレントゲン藝術研究所など美術の場に発表を移す。1995年より「動物堂」で動物の飼育と販売に従事しながら、1999年「日本ゼロ年」展、2005年「パンゲント」展など。2007年、平田オリザ作「転校生」の演出で演劇に復帰。以後、FT、吾妻橋ダンスクロッシング、ボ・ナイトなどに連続参加。小説家朝吹真理子、山下澄人との共同制作や、大友良英、テニスコーツなど音楽家とのライブ共演も多数。近年の主な仕事に、展覧会「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」、演劇作品「スワン666」（2018年）、小説『彼の娘』（2017年）など。戯曲『ブルーシート』（2014年）で第58回岸田國士戯曲賞を受賞。



田中功起 (たなか・こおき)

1975年生まれ。アーティスト。主に参加した展覧会にあいちトリエンナーレ（2019）、ミュンスター彫刻プロジェクト（2017）、ヴェネチア・ビエンナーレ（2017）など。2015年にドイツ銀行によるアーティスト・オブ・ザ・イヤー、2013年に参加したヴェネチア・ビエンナーレでは日本館が特別表彰を受ける。主な著作、作品集に『Vulnerable Histories (An Archive)』（JRP | Ringier、2018年）、『Precarious Practice』（Hatje Cantz、2015年）、『必然的にばらばらなものが生まれてくる』（武蔵野美術大学出版局、2014年）など。【撮影＝題府基之】



梅津庸一 (うめつ・よういち)

1982年山形生まれ。美術家、パーブルーム主宰。美術、絵画が生起する地点に常に関心を抱く。日本の近代洋画の黎明期の作品を自らに憑依させた自画像、自身のパフォーマンスを記録した映像作品、自宅で20歳前後の生徒5名と共に制作/生活を営む私塾「パーブルーム予備校」を主宰、展覧会の企画、ギャラリーの運営、テキストの執筆など活動は多岐にわたる。主な展覧会に『未遂の花粉』（2017年、愛知県美術館）、『恋せよ乙女！パーブルーム大学と梅津庸一の構想画』（2017年、ワタリウム美術館）、『パーブルーム予備校』（2018年、パーブルーム予備校ほか）、『百年の編み手たち —流動する日本の近現代美術—』（2019年、東京都現代美術館）。作品集に『ラムからマトン』（アートダイバー）。



弓指寛治 (ゆみさし・かんじ)

「自死」や「慰霊」をテーマに創作を続ける芸術家。大学院修了後、学生時代の友人と名古屋で映像制作会社を起業。2013年に代表取締役を辞任し上京、作家活動を開始。ゲンロンカオス*ラウンジ新芸術校の第一期生として学んでいた2015年に、交通事故後で心身のバランスを崩していた母親が自死。出棺前に「金環を持った鳥のモチーフ」が浮かび、以後制作される多くの作品で繰り返し登場する彼の表現の核となっている。2018年に約30年前に自死したアイドルをテーマにした《Oの慰霊》が第21回岡本太郎現代芸術賞で敏子賞を受ける。あいちトリエンナーレ2019では「鹿沼クレーン車暴走事故」を題材にした作品「輝けるこども」を発表した。



和田唯奈 (わだ・ゆいな)

画家。1989年岐阜県生まれ。加納高等学校美術科、名古屋芸術大学洋画2コース卒業。Gallery Delaive (アムステルダム) 所属。GEISAI#17 鈴木心賞受賞、ゲンロン カオス*ラウンジ新芸術校第1期夏野剛賞、2期上級コース卒業。「絵と心と家族」への関心から、2017年4月より『しんかぞくのお家』を主催。2019年3月には、絵本『ぼっかりちゃん』をART DIVERより刊行。

主な展覧会：

2013-2014年 個展 Gallery Delaive (アムステルダム)

2018-2019年 お絵描きのお家による絵画展『しんかぞく』 都内各所、B.Esta337 (東京)

2019年 あいちトリエンナーレ内企画『レンタルあかちゃん』 豊田市駅周辺 (愛知)



磯村暖 (いそむら・だん)

1992年東京都生まれ。2016年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。2017年ゲンロン カオス*ラウンジ 新芸術校第2期金賞受賞。Asian Cultural Council ニューヨークフェローシップ2019年グランティ。国内外での歴史や宗教、フォークアートに関するリサーチをベースとし、トランスナショナルな視点でインスタレーションや絵画などの制作活動を行う。近年は台湾の關渡美術館やタイのワットパイローンウア寺院での滞在制作、東京のクラブイベントとのコラボレーションなどフィールドを横断した活動を展開している。近年の主な個展に、「わたしたちの防犯グッズ」(東京、銀座蔦屋書店、2019年)、「LOVE NOW」(東京、EUKARYOTE、2018年)、「Good Neighbors」(東京、ON SUNDAYS/ワタリウム美術館、2017年)、「地獄の星」(東京、TAV GALLERY、2016年)。近年の主なグループ展に、「都市は自然」(長野、セゾン現代美術館、2020)、「TOKYO 2021」(東京、TODA BUILDING、2019年)、「City Flip-Flop」(台北、空總臺灣當代文化實驗場、2019年)、「留洋四鏢客」(台北、TKG+、2019年) 【撮影=Nong Rak】



青木美紅 (あおき・みく)

美術家。1996年生まれ。2019年度、多摩美術大学美術学部油画専攻卒業。自身が配偶者間人工授精で生まれたことを契機に、生命に人の手が加えられることやその影響、最新医療や永遠の生命についても制作し考察している。『あいちトリエンナーレ2019』にて、最年少招聘作家としてインスタレーション作品『1996』を展示(名古屋市美術館)。2019年3月、ゲンロンカオス*ラウンジ新芸術校4期最終成果展『ホーム・ランド』にて、第一席である金賞受賞(審査員:岩淵貞哉、黒瀬陽平、津田大介、和多利浩一)。2020年6月、初個展『"zoe"』を行う。『新潮』2020年3月号には初のエッセイ「生きているぞー」を寄稿。

参考 URL

新芸術校 公式サイト <http://school.genron.co.jp/gcls>

新芸術校 Facebook ページ <https://www.facebook.com/genrongcls>

ゲンロンスクール <https://school.genron.co.jp>

ゲンロン <https://genron-tomonokai.com>

ゲンロンカフェ <https://genron-cafe.jp>

主催、問い合わせ先

株式会社ゲンロン

〒141-003 東京都品川区西五反田 1-16-6 イルモンドビル 2F

Tel : 03-6417-9230 / Fax : 03-6417-9231

Mail : info@genron.co.jp (担当 小宮、松森)

<http://genron.co.jp>